

2022年6月19日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

イザヤ書 53 : 1～12

ルカによる福音書 23 : 13～25

「人々の大声」

【前奏】

【招詞】 詩編 51 : 12～14

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 53 : 1～12

ルカによる福音書 23 : 13～25

【説教】 「人々の大声」

<十字架刑の判決に向かって>

今日の聖書箇所は、ローマ帝国のユダヤ総督ピラトのもとで、いよいよイエスさまに十字架刑の判決が下る場面です。

イエスさまが逮捕され、まず最初に、ユダヤ人たちの宗教的な事柄に決定を下す最高法院が、神さまを冒瀆した罪でイエスさまを有罪としました。イエスさまが、自分を神に等しい者、神の子であるとしたからです。イエスさまがメシア、神に遣わされた救い主であり、神の子であるというのは、真実なことでした。しかし、それを受け入れられず、却ってイエスさまを妬み、邪魔に思っているユダヤ人指導者たちは、自分たちの思いに従って、まことの神の御子イエスさまを、神を冒瀆した罪で有罪としたのです。

最高法院の人々、そしてユダヤ人の民衆は、その足でイエスさまをローマの総督ピラトのもとに連れて行きました。ユダヤの地域は、政治的にはローマ帝国の支配下にありましたから、ユダヤ人の最高法院で、勝手にイエスさまに死刑判決を出すことは出来ないからです。

ユダヤ人の指導者たちと民衆は、イエスさまがあたかもローマ皇帝に逆らい、自分を王と名乗ってローマ帝国を脅かそうとしているかのように、ピラトに訴え出ました。

しかし、これはユダヤ人の中の宗教的な問題で、ローマ帝国にとって脅威になるような問題ではないと見たピラトは、どうしてもイエスさまを死刑にする理由を見出せません。

それでピラトは、ガリラヤ領主のヘロデの下にイエスさまを送って、裁かせようとしてきました。しかしヘロデもまた、イエスさまを死刑にすることなく、侮辱して、そのまま送り返してきたのです。

つまり、イエスさまに死刑に当たる罪がないことを、ピラトとヘロデ、二人の時の権力者が認めたのでした。

### <ローマ総督ピラトの裁判の結論>

今日の聖書箇所は、その続きになります。

ピラトはその結論を、ユダヤ人の祭司長たちと議員たち、つまり最高法院を構成する人々と、一緒に訴えて来た民衆に向かって、告げました。13節以下にこうあります。

「ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った。『あなたたちは、この男を民衆を惑わす者としてわたしのところに連れて来た。わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。ヘロデとても同じであった。それで、我々のもとに送り返してきたのだが、この男は死刑に当たるようなことは何もしていない。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。』」

ピラトは人々に、イエスさまは「死刑に当たるようなことは何もしていない」、という結論を告げ、「だから、鞭で懲らしめて釈放しよう」と言いました。

罪が見当たらないのに、どうして鞭打って懲らしめるのか、と思われるかも知れませんが、元の文章には「鞭」という言葉はありません。この言葉はただ「懲らしめる、教育する、しつける」という言葉です。当時の子どもに対する教育は、鞭を使ってすることが当たり前でしたから、こういう訳になったのでしょう。

つまりここでピラトは、訴えを起こしたユダヤ人たちに対して、イエスという人物に対しては、もうこんな騒動を起こしたり、誤解を招いたりしないように、懲らしめてよく言い聞かせてから釈放するから、それであなたたちは満足しなさい、と言っているのです。

### <バラバ>

ところが、18節にはこうあります。「人々は一斉に『その男を殺せ。バラバを釈放しろ』と叫んだ」。

急に「バラバを釈放する」、ということが出て来ました。これは18節の直前の小さい十字架のようなマーク、短剣標と言いますが、ルカによる福音書の最後のページに、そこに入るべき一節が記されており、それを読むと理由が分かります。短剣標の部分は、翻訳の底本になる写本には入っていない一節なのですが、他の文献には記載されていて、聖書を読む上ではあると良いと思われるので記されたものです。そこにはこうあります。

「祭りの度ごとに、ピラトは、囚人を一人彼らに釈放してやらなければならない。」

つまり、ちょうどこの時はユダヤ人の大きなお祭り、過越祭の期間でした。その時には、ローマ総督のピラトは、恩赦を与え、ユダヤ人の囚人を一人、彼らに釈放してあげることになっていたのです。

それで、ピラトはイエスさまを釈放しようとしたのですが、ユダヤ人の人々は、イエスさまはいらない、バラバを釈放してくれ、と叫んだということなのです。

バラバは、暴動と殺人のかどで投獄されていたとありました。イエスさまと違って、罪状もはっきりしており、死刑にされても誰も文句を言わない人物です。誰もが、殺されても仕方ない、当然だ、と思うような人物です。

ですから、人々は決して、バラバを慕っていたとか、助けたかったという訳ではなかったでしょう。とにかく、イエスさまを助けたくない。イエスさまは殺して欲しい。その思いで、「バラバを釈放しろ」と叫んだのです。ひたすら、イエスさまへの殺意、妬み、憎しみのために、イエスさまを殺すため、バラバの釈放を求めたのです。

ピラトは、2回、3回とイエスさまを釈放しようと呼びかけます。

しかし、人々は「十字架につける、十字架につける」と叫び続けた。大声でイエスさまを十字架で処刑することを要求し続けたのです。

<呪われた者>

さて、ここで実は、はじめて「十字架」という死刑の方法が出て来ます。

十字架刑は、ユダヤ人の中で行われることはありません。ローマ帝国における処刑方法、異邦人の処刑道具です。しかも、これはローマ帝国の中でも奴隷や身分の低い者に科される刑罰でした。つまり人々は、イエスさまがユダヤ人として死ぬこともゆるさなかった。徹底的に悲惨で屈辱的な死に方を求めたのです。

しかも、木に架けられる、というのはユダヤ人にとって特別な意味がありました。それは申命記 21：23 に「木にかけられた者は、神に呪われた者だからである」とあるように、神の呪いを意味することなのです。

つまりユダヤ人の指導者たちと民衆は、まことの神の御子イエスさまに対し、その真実に対して目を瞑り、神を冒瀆したと言って罪に定め、なおかつ、神の呪いの中に置こうとしたのです。メシアを、神の御子イエスさまを、神の祝福からこぼれ落ち、神の民の中から追い出された、滅ぼされるべき呪われた者として、取り扱ったのです。

そして、23～24 節にはこうあります。「ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。そこで、ピラトは彼らの要求をいれる決定を下した。」

「その声はますます強くなった」というのは、直訳すれば「彼らの声が勝った、勝っていた」「彼らの声がまさっていった」となります。人々の声が、彼らの大声が、とうとうピラトを屈服させました。そしてピラトは、彼らの要求を入れる決定を下したのです。

つまり、暴動と殺人を犯したバラバを釈放し、罪を見出せなかったイエスさまを、ユダヤ人の民衆に引き渡して、彼らの思い通りにさせた。十字架刑を認めた、というのです。

ルカによる福音書は、ピラトの下でイエスさまに十字架刑が下されたのは、ユダヤ人の指導者たちだけでなく、ユダヤの人々、選ばれた神の民である、民衆の声がそうさせた、ということ、意識的に記しています。

ここに登場するユダヤ人の民衆たちとは、神の民イスラエルであり、神さまがなそうとしておられる救いのご計画を担うために、神さまによって選ばれた民なのです。神さまに救われ、共に歩み、メシアの預言、救いのご計画を聞かされて来た民なのです。

ルカの 19 章の終わりには、イエスさまがエルサレムに入られた時、つまりこの裁判の一週間前は、神殿で「民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていた」とありました。そのために指導者たちは民衆を恐れて、イエスさまに手出し出来ないほどだったのです。

その民衆が今や、神さまのご計画に背き、神の御子を呪い、声をあげて大声で叫び、イエスさまを神の民から排除し、呪われた十字架刑へと、追いやったのです。何という、民衆の心変わり、何という裏切り、何という罪深さでしょうか。

#### <わたしたちの姿>

しかし、わたしたちはそのことを、ユダヤ人とは何という酷い、罪深い民なんだろう、と眺めているわけにはいきません。

わたしたちもまた、神さまの御心を知らされているのに、神さまに従おうとしないなら、神さまの御言葉を受け入れないなら、この民衆と全く同じ罪を犯しているのです。自分のまことの主人である神の御子を、そうでないかのように扱って、自分を主人にして生きようとする。神の御子イエスさまを心に迎えようとせず、亡き者にしようとする。そんなわたしたちも、民衆と同じことをしているのです。

そしてわたしたちは、ユダヤ人の指導者たちのようにもなる。神さまの真実を受け入れず、自分の罪を認めず、プライドや誇りを守るために、イエスさまが間違っている、イエスさまが悪いのだと、自分の正しさを主張する。そして神さまの御心に背き、反抗しているのです。

そしてわたしたちは、あのピラトのようにもなる。周りの声に流されて、正しいと思ったことを曲げてしまう。人々の大声に正しさをかき消され、誤ったことを認めてしまう。

これらの、人間のどうしようもない罪が。わたしたちの罪が。まったく罪のない、唯一の正しいお方である神の御子を、真実を歪めて裁き、理不尽に罪を負わせ、呪いの中で殺したのです。

イエスさまを十字架へと向かわせた、大声で叫ぶ人々の中に。神に背く指導者の中に。正しさを歪めるピラトの中に。ここにいるわたしたち一人一人もまた、立っていたのです。

#### <最も低くされたイエスさま>

イエスさまは沈黙し、この人々の罪を、わたしたちの罪を、耐え忍ばれました。すべてを受け入れ、すべてを引き受け、ただお一人、神さまの御心を見つめ、それを成し遂げるために、立ち続けておられました。

人々は、あの暴動と殺人を犯したバラバよりも、イエスさまこそ死ぬべきだと訴えました。カルヴァンは、この犯罪人バラバが釈放され、イエスさまが殺されることになったのは、イエスさまが、人間が最も卑しいとみるべき者よりも、もっと低い者とされたということなのだ、と語ります。

イエスさまは、人々によって、理不尽に、不正義に、妬みと殺意と呪いの只中で、殺人犯にもまして、死ぬべき者とされたのです。

ところが、そのために、明らかに自分の罪によって、赦される余地もなく死刑にされるはずだったバラバは、このイエスさまの登場によって、突然、罪を赦され、釈放されることになりました。

ここに、驚くべき逆転が起きました。罪人が置かれるべき、神の祝福の外に、呪いの十字架に、罪のないイエスさまが置かれることによって、本来、呪われて死ぬべきだった者が、命を得て、生きる者とされたのです。

ある説教者は、イエスさまは、ご自分が呪われた十字架に架けられることで、バラバが生きることになったことを、どう思われたらうか、と想像しました。こんなことは不当であると。自分が助けられて、バラバこそ殺されるべきだと思われたらうか。いや、イエスさまは喜ばれたのではないか、というのです。神の御子を呪いの木にかけ、人間の罪の深さを誰よりも悲しんでおられながら、しかしバラバではなく、ご自分が死に定められたことを、喜んでその身に引き受けられたのではないか、と。

ここには、はっきりと、イエスさまによって、赦しへの道が、命への道が、拓かれています。すべての人の罪を担い、ご自分がその呪いをすべて引き受け、最も卑しい者よりも低くされることで、イエスさまは、死ぬべき罪人を生かし、命へと招いて下さったのです。

本当はバラバが、本当は罪を犯したわたしたちが、呪われるべき者でした。自分の罪の故に、滅ぼされるべき者でした。

しかし、そのようなバラバよりも低くなられることで、このわたしたちよりも低くなられることで、イエスさまは、わたしたちの呪いの死を引き受けて下さり、わたしたちの罪を担って下さり、このわたしを生かすために、このわたしに代わって、十字架の死を死んで下さるのです。

#### <わたしを生かすイエスさまの死>

救い主イエスさまの、苦難の十字架の歩みを預言していたイザヤ書 53：4 にはこうあります。「彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。」

神の手にかかり、打たれたから、彼は苦しんでいる。わたしたちは今でもどこかで、なぜイエスさまが十字架で死なれたのか。なぜ神に呪われた者として死なれたのか。そのことを、どこか遠い、人ごとのように感じていることがあるかも知れません。

しかし、イエスさまが担ったのは、わたしたちの病、わたしたちの痛みだったのです。わたしたちの呪いであり、わたしたちの罪であったのです。

罪に捕らえられた人々の大声が勝って、イエスさまを神に呪われた者として十字架につけた時。人々の声が、まるで勝利したかのように見えた時。

実は、その十字架の上においては、すべての人の罪を赦す、イエスさまの救いが成し遂げられ、イエスさまこそが、すべての罪に対して勝利しておられたのです。

すべての人を立ち帰らせ、生かそうとする、イエスさまを遣わして下さった父なる神さまの愛が、すべての人々の罪にまさって、この御子の十字架において、確かに勝利して下さっていたのです。

わたしたちは、大声でイエスさまを呪い、殺した、罪深い人々の中の一人でありました。そしてまた、わたしたちは、自分の罪のために死ぬべき者であったのに、代わりにイエスさまが死ぬことで生かされた、バラバでもあったのです。

十字架は、もっとも残酷で悲惨な刑罰の一つであり、木にかけられて死ぬことは神の呪いを示すものです。しかし、その悲惨も、呪いも、すべてをイエスさまが担って下さり、この神の御子が十字架に架かって下さったゆえに。今や、教会にとっては、このイエスさまの十字架は、神さまの愛のしるし、罪の赦しのしるしとなったのです。

わたしたちは、このイエスさまの十字架の前で、「イエスさまを十字架につけろ」と叫び、神の御子を呪いの死へと追いやってしまった、自分の深い罪を思い、悔い改めます。

しかしまた同時に、わたしが罪のために受けなければならなかった呪いを、死を、イエスさまが代わりに担って死んで下さることによって、生きる者とされたこと。罪と、それゆえの滅びから救われ、死から命へ、呪いから祝福へと移されたこと。そのことを十字架によって確かに示され、深い慰めと、癒しを与えられるのです。

#### 【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちもまた、イエスさまを十字架につけた一人でありました。御心に背き、自分の思いに従い、人に流され、神の御子を呪いました。当時の民衆もまた、そんな大それたことをしているとは、自分でも分かっていなかったに違いありません。しかし、わたしたちは、そのような恐ろしい罪を、いとも簡単に犯してしまうのです。

どうか、わたしたちの罪をお赦し下さい。このようなわたしたちを憐れんで下さい。

イエスさまが、わたしたちが置かれるべき呪いの十字架に、ご自身が置かれることを受け入れて下さり、罪人であるわたしたちが釈放され、生きることを良しとして下さったことを、心から感謝いたします。イエスさまの十字架によって、罪を赦され、命を与えられ、神さまに立ち帰る道が備えられたことを、神さまと共に生きる者とされたことを、深い悔い改めと、感謝を持って、歩んでいくことができますように。

わたしたちの救い主、イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 288 「恵みにかがやき」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讚美歌】 25 「父、子、聖霊に」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン